

# 孤立・無縁社会を生き抜く

## ～なぜ人は「絆」を求めるのか～

追手門学院大学心理学部 溝部 宏二

### 1. はじめに

この小論は、2016年3月2日に開催された追手門学院大学創立50周年記念事業「地域支援心理研究センター分室・附属心の相談室分室 開設記念シンポジウム：孤立・無縁社会を生き抜く」にてシンポジストとして報告した内容「アナタの知らないうら（こころ）の世界 -なぜ人は『絆』を求めるのか-」を元に、論文としてまとめなおしたものである。

現代は、「孤立・無縁」社会であると言われる。虐めや引き籠もりと言った日常的に見られる事象のみならず、青少年による重大事件や老人の孤独死がニュースで報道される度に、人間関係の変質や希薄化が指摘される。その反動か、震災などで窮地に瀕した人々への多くの支援を通して、「まだまだ日本人は捨てたものではない」と、「絆」の重要性が声高に叫ばれている。先ず、この「孤立」を解消する特効薬であるかの様な「絆」の意味について考えてみたいと思う。

我々は「裏と表」の両方の世界を生きているのだが、うらの世界を見つめることはあまり行わない。何故なら、うらには見たくないもの、醜いものを隠し持っているからである。自らのうらに存在する醜い（と感じている）ものは価値の無いものなのなのであろうか。きれいなおもての「正論」のみが認められるべき事であらうか。ここでは、「曲論」と言われかねないうら（こころ）の世界に焦点を当てようと思う。うらの世界は、知（ロゴス）よりも情（パトス）が支配する世界で

あり、「絆」はうらの世界を観るキーワードとなる。また、「絆」を日本人が好む理由を「イノセンス」という概念を用いて解説し、イノセンスを解体して適度に「諦める」ことで孤立を乗り越える可能性について言及する。

### 2. 「家族」の変質

孤立・無縁を考える場合、先ず、「家族」という縦の関係の弱体化や「地域」や「学校・職場」という横の関係の弱体化が指摘されている。ここでは、家族関係の変質と、それを補うべき行政のあり方について考えてみる事とする。

個人のレジリエンス（歪みを跳ね返す力：ストレスに抗する力）を高めるにはセーフティネット（安全確保）の充実が重要である。現代社会には、このセーフティネットがないと言う事、その整備が必要であることは政治学者も社会学者も心理学者も指摘する。セーフティネットを考える場合、先ず家族について考えるのが道理であろう。しかし内田（2010）は、「セーフティネットの整備の喫緊である事を主張する人は多いが、家族の紐帯を打ち固めることの喫緊である事を主張する人は少ない。」と述べている。何故、個人のレジリエンスを高めるのに最も効率的な「家族」がセーフティネットになり得ないのか？それを倫理学のテキスト（井上、2004）の「親密圏（セーフティネット）」の項を引用しながら解説している。井上によると「近代家族」は、「親密な関係性を育む」を一義

のとせず「質の良い国民を養成する」を求められたとしている。そこで、「一心同体的」共同性に基礎づけられた近代家族は解体され、個人は家族から解放されなければならない。そして、家族から解放されて所属するのが親密圏であるとしている。ここで重要なのは、親密圏の条件としてメンバーの対等性が挙げられている事である。とても理に適っている見解であるが、そうすると障害者や社会的弱者が親密圏に入り込む余地が無い。もちろん、社会的弱者も尊重されなければならないのは言うまでもないが、対等な関係を結ぶと言う考えには疑問が残る。家族は、その集団の中で「最も弱い者（子ども・老人）」を軸に構成されるのを原則とすると内田（2010）は述べている。そこに存在する関係性は、対等性では無く、「気遣う者」と「気遣われる者」が存在し、局面ごとに入れ替わる流動性を旨としている。現代社会は、必要以上に「『対等の関係』は常に真である」と言い過ぎるのではなかろうか。「『非対等の関係』にも真がある」と考える事は出来まいか。新渡戸（1899）は、その著書で「惻隱の心は人の端なり」と述べている。「惻隱の情」とは、「敗者への共感」「劣者への同情」「弱者への愛情」であり、観音菩薩が示す「慈悲」の心であろうし、騎士道の“Noblesse Oblige（高き身分に伴う義務）”との精神に通じるものであろう。これらに共通しているのは、上からの愛（仁）なのである。以上より、対等を旨とする親密圏は非対等を旨とする家族の代わりにはなり得ない。行政が社会的弱者に関わる場合、対等性が問われるのは当然であろう。よって、対等な親密圏を構築しようとする行政の限界が見えてくる。そこで、行政が親密圏ではどうしてもない部分を補うために、「家族機能の回復」を考え始めるのは時代の必然であろう。

日本政府（自民党）は、ホームページの「憲法改正草案Q & A」（自民党，2017）の

中で、「家族・婚姻等に関する基本原則」の改憲案作成理由について次のような見解を述べているので、以下抜粋する。

【Q19】 家族に関する規定は、どのように変えたのですか？

【自民党の答】 家族は、社会の極めて重要な存在ですが、昨今、家族の絆が薄くなってきていると言われていています。こうしたことに鑑みて、24条1項に家族の規定を新設し、「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として、尊重される。家族は、互いに助け合わなければならない。」と規定しました。なお、前段については、世界人権宣言16条3項も参考にしました。

- 党内議論では、「親子の扶養義務についても明文の規定を置くべきである。」との意見もありましたが、それは基本的に法律事項であることや、「家族は、互いに助け合わなければならない」という規定を置いたことから、採用しませんでした。

（参考）世界人権宣言16条3項

- 家族は、社会の自然かつ基礎的な単位であり、社会及び国による保護を受ける権利を有する。

この様に、憲法に「家族の在り方」を規定するのであるが、【Q & A20】にて「家族の形に国家が介入するのではない」旨を述べ、更に「個人と家族を対比するものではない」と述べている。この見解は、近代国家が成立するには、家父長制が必須であったからに他ならない。そして、日本の近代文学は、島崎藤村（2005）の「破戒」に代表される自然主義文学をその典型として、家への、家父長への反抗から成立したものとされる。明治に産声を上げた個人主義は、戦後に米国による強制的な家父長制度の解体に伴い繁栄する事となる。日本政府としても、ここで家⇔個人という構図を持ち出して、個を尊重するリベラリストを刺激したくないであろう。明治～戦前の日本人は、家（父親）をどの様に

乗り越えるかが重要なテーマであった。精神的に言うとエディプス・コンプレックス (Freud, 1917 井村・馬場訳 1970) を超克する必要があったのである。戦後は、父なる者に抗いながら自分を構築する必要性が希薄になったと考えられる。言い換えれば現代は、エディプス・コンプレックスを超克することなく前エディプス期の問題を抱えたまま生きる人々が多数存在する時代なのである。エディプス・コンプレックスは、息子が母親を愛し父親を憎むと言う、愛欲を巡る葛藤に由来しているが、古澤 (1954) が提唱した阿闍世コンプレックスは、前エディプス期に関与する概念であり、エディプス・コンプレックスよりもっと本質的な自己の出生の由来あるいは生命の根源である自己の成り立ちに関するコンプレックスである。古澤は、「近親相姦と父親殺しをテーマとするエディプス・コンプレックスに対して、母親殺しと未生怨をテーマにする点に阿闍世コンプレックスの独自性がある」と主張しており、「母を愛するが故に母を殺害せんとする欲望」=阿闍世コンプレックスを提示したのである (小此木・北山, 2001)。孤立・無縁の背景を考える場合、個の優位に伴う「個と家族の葛藤の減少」により前エディプス期の問題 (阿闍世コンプレックス) を抱える人間が増えているという観点を加える事も必要なのではなかろうか。

### 3. 「イノセンス」の肯定と解体

芹沢 (1997) は、人間の成熟を「イノセンス (innocence)」をキーワードに考えている。イノセンスとは、無垢とか潔白とか無罪という意味であるが、芹沢は「窮地に立ちいたった時に人が発する言葉、取る行為に照応して出現する心のあり方、心的場所の一つ」と考えている。その言葉・行為が発するメッセージは、「自分には責任がない」「このままのかたちでは現実を引き受けられない」と言

う感情を内包している。生まれてきたことに当人は責任がない (性・体・親は選べない) からである。子どもを世に出したのは、全面的に親の責任であり「根本的に親が悪い (未生怨)」と言えるであろう。成熟すると言う事を、このメッセージを「自分には責任がある」と言うメッセージに自分の手で書き換える事であると考えている。成熟するためには、イノセンスを受け止めて、「何とかして欲しい」と訴えることが許される心的場所が肯定される必要がある。確かにこの論理は、精神科医には極めて納得のいくものである。現代では、何らかの問題が生じた場合に自責的に「私が悪かった (自分には責任がある)」と考える事よりも、他責的に「相手が悪い (自分には責任がない)」と考える場合が多くなっていると感じているからである。こうした風潮は、前述の通り、現代社会の個人主義的な「自分 (のみ) を愛する」事に重きを置く考えに立脚している様に見える。戦前の、「滅私奉公」や「國體の維持」を美德とした「公」を「個」より重んじた封建主義や全体主義への反省なのかもしれない。しかし、現代における「自分を愛する」という考えは端的に「利己的に振る舞う=エゴイズム」と言う事だと理解している様に感じる。TVのコマーシャルでも、「夢は必ず叶う」=「諦める (苦悩を引き受ける) は敗北」であるかのごとく欲望を肯定する意見が垂れ流されている。「お・も・て・な・し」という言葉が一時期流行ったが、これは、「裏も表もなし」が語源なので、私を捨ててこそその「おもてなし」であり、「秘すれば花」の美意識であるはずのものが、言語化することで自己主張して表に出てしまい裏の世界を打ち壊している。また、世界的に大ヒットした「ありのままの〜♪」であるが、認めるべきは自分の中に存在する裏 (心) も表 (面) も含めた「真正の (卑小な) 自分=ありのままの自分」であるべきはずなのに、「ありのままの自分=

現実では無い肥大した自尊感情（ありたい自分）こそが本当の自分」と理解している様に感じる。肥大するだけ肥大した傲慢な「自我」の肯定（行き過ぎた「人間中心主義」）が、Day Dream Believerを増産してしまっていると理解している。まさに、字義的な意味での「ろ・く・で・な・し」の増産なのであろう。現代は、小此木（1981）が予見した「自己愛人間（自己愛者）の時代」と言えるのであろう、芹沢風に言い換えるとイノセンスに退行した時代であるし、精神分析風に言い換えると前エディプス期に固着した時代となる。

自己愛が育まれる素地となる二者間交流を、北山（2012）の浮世絵を用いた説明に若干の補足を加えて概説する。図1.に示すのは、米国の精神分析家Freeman（1993）が報告している様に、金太郎の下から縋り付く行動「甘える（求める愛：受動的）」で山姥の上から「甘えさせる（与える愛：能動的）」行動を引き起こしている。その後には生じる、親子が「抱っこする/される」横並びの関係とは、「甘え」が成就した静的関係（一心同体→二者関係の育成）である。絆は一心同体へのパスポートと言え。このイノセンスを肯

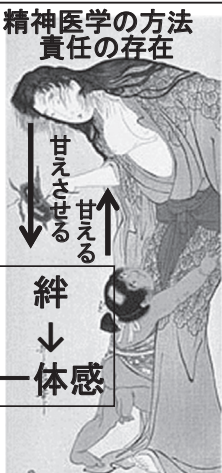
定する状態こそが、健康な自己愛を育み、イノセンスを解体（独り立ち）する土壌となる。言い換えると、上下の愛である「甘え」が満たされて母子一体（抱っこ）へ至る過程の動的状態が「(母子の)絆」である。そもそも「絆」の本来の意味は、「馬・犬・鷹など、動物をつなぎとめる綱（広辞苑）」であり、転じて「断つに忍びがたい恩愛、離れがたい情愛」となった。「絆」は「きずな」以外の訓読みでは「ほだし」と読み、上の者が下の者を「痛しい（愛しい）」と思い、「ほだされる」と言う意味でもある。「絆」と言う語には本来的に上下関係が内在しており、支配—被支配のニュアンスがある。つまり、甘えさせる側の関わり方次第では、容易に支配—被支配の関係に転換するものである。「弱者への愛情」との意味で前述の「惻隠の情」と共通する心性であり、“Noblesse Oblige（高き身分に伴う義務）”で示された与える側（甘えさせる側）の姿勢が問われることとなる。土居（1971）によれば「甘え」とは、乳児の精神がある程度して、母親が自分と別の存在であると知覚した後に、母親を求めることを指して言う言葉である。「甘え」とは母子が分化してしまい寄り添いを感じた子ど

**山姥と金太郎・栗(喜多川歌麿 画)**

- 「甘える」: 求める愛(受動的)→被支配?
- 「甘えさせる」: 与える愛(能動的)→支配?
- 「甘える」ことで「甘えさせる」ことを引き出す(動的: 距離がある)→安定した満足(静的: 距離が無くなる=一心同体: イノセンス)オキシトシンの関与?
- 上下の愛(親子の愛/甘え)が水平の愛(大人の愛/博愛: 欧米)へ移行する?
- 思春期はこの通過段階=(下から)甘えているのに、(上から)の対応にムカつく
- 「絆」は「ほだし」と読み、上の者が下の者を「痛しい(愛しい)」と思い「ほだされる」上下の愛(「絆」を日本人が好む理由)

一者関係→二者関係の育成      イノセンスの肯定(支持的)

**精神医学の方法  
責任の存在**



**絆  
↓  
一体感**

(図1.) 上下の愛=甘え(乳幼児期)  
(Freeman, 1993 改)

もが、再び母子一体（自他未分化）の世界への憧憬とイノセンスへの退行（回帰）を示している状態と考えられまいか。子どもがさらに成長すれば、下から甘えながら上からの対応にムカつくと言う時期が生じる。所謂「反抗期」である。そこで、図2.に示す様に、抱っこでは無い「さり気無い情交（二者間内交流）」を保持したまま、見つめ合わずに共に対象を眺める関係（二者間外交流）を構築すると、エディプス葛藤の克服をサポートし、安定した三者関係の世界へ乗り出して行くのであろう。図3.は三者関係が獲得された後の、大人の関係性を示している。大人の対人関係（安定した三者関係）とは、平等で博愛精神に裏打ちされたものであろうか。個人主義者は必ずそう言うであろうし、原理的には正しいと考えている。神の下に平等である一神教の素地を持つキリスト教徒やイスラム教徒にとっては、博愛精神に違和感はないのであろう（「神は死んだ」現代では事情は変化しつつあろうが）。しかし甘えを許容する日本社会では、「甘える/甘えさせる（甘やかす）」関係が生じやすいのではなかろうか。ここで、強調すべき点は、「甘えさせる」と「甘やかす」の違いについてである。「甘

えさせる」の主体は子どもであり、「甘やかす」の主体は親にある。よって、子どもの為に「甘えさせる」行為は、イノセンスの肯定となり解体へ繋がるが、親の都合による「甘やかす」行為では、イノセンスが肯定される事はなく退行を促すと考えている。健全と言われる多くの人々にとっても、外（おもて）の世界では、平等に振る舞ったとしても、甘えが許される家（うら）では、上下の関係性を持ちやすい事は想像に難くない。「甘える/甘えさせる」役割が流動的な場合は与える側も相手の立場で物を考える（甘えさせる）事が可能であろうが、役割が固定化し慢性状態となれば、どうしても与える側が自分の都合を優先する（甘やかす）対応になるので、大人の関係性が退行し図1.に示した状態の側面である支配-被支配関係に陥る。家庭内暴力（Domestic Violence: DV）で例えるなら、「分かるはず」との夫の一心同体幻想が満たされなければ、相手を攻撃する「甘え」による行動が出現し、甘え行動に誘発されて「甘やかす」と言う暴力を受け入れる妻の行動が生じる。この特定の間人関係に過剰に依存した、支配-被支配の繋がりである「共依存関係」が形成されるのである。ここで表出

• 鈴木春信 画  
（児童期の親子交流例）

- 情緒的交流を維持（通じる：身体接触）しながら外部の対象を共に眺める（考える）→ミラーニューロンの関与？（自閉症では困難）
- 上下の愛が上手いかなかった児童期から重要な交流パターン

**三者関係の育成**

**心理臨床の方法**  
**イノセンスの解体過程**

（図2.）二者間内交流と二者間外交流（児童期以降）  
（北山修, 2012 改）

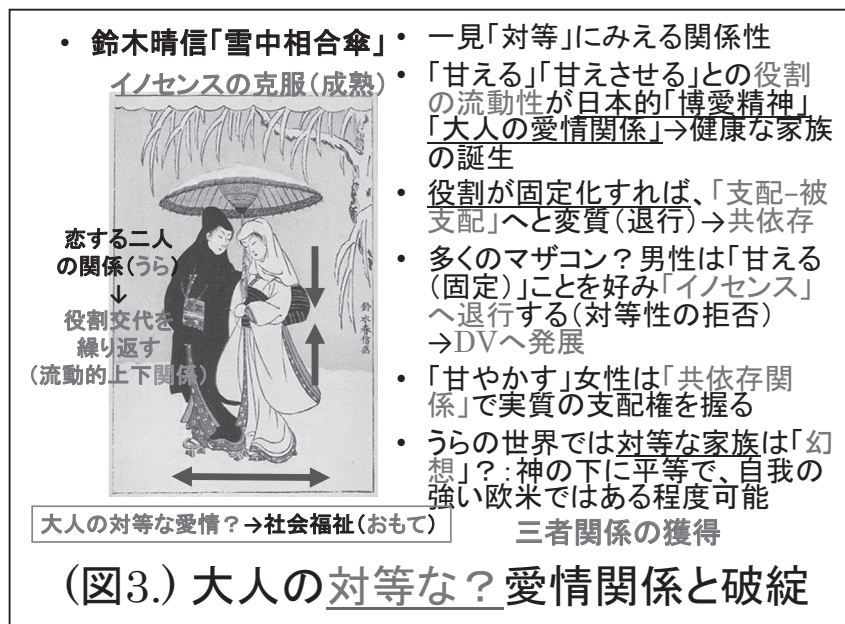
された「分かって欲しい」「自分を大切にされたい欲求」は、健康な自己愛でも生じるのであるが、徹底的に要求する姿勢は、過剰に肥大した自己愛の状態によるものである。イノセンスが肯定された経験（抱っこ）が乏しいと、イノセンスが解体される事なくイノセンスの状態に容易に退行するのではなかろうか。そうした状態にある者を「自己愛者」と呼ぶ事とする。

それでは、自己愛者の生き辛さについて考えて行きたいと思う。自己愛者は、その肥大した自己愛から、自分のプライドを傷つけた（と思われる）人に向かい激しい怒りを感じる。多くの者は、プライドを傷つけられた際は、先ず「恥」を感じるのであるが、自己愛者は恥の感覚を持ち続けることが出来ない。そこで、恥の感覚を怒りに転換する。彼らの中では、彼らは被害者なのである。被害者として正当な怒りであると認識されているから、躊躇無く怒りに我を忘れる事ができる。自己の価値観を正しい（間違っているのは相手!）と確信する「自己絶対視」から生じるのであろう。自分の正しさを証明しようと、相手を非難し続ける。周りに問題があり、周りを変えようとするのであるがそれは不可

能である。何故なら、多くの場合は相手も同様に「自己絶対視」しているからである。機序について、前エディプス期の子どもに関して優れた考察をしたKleinの「妄想分裂ポジション」の概念を用いて説明する。

妄想分裂ポジション (Klein, 1946 小此木・岩崎訳 1985) とは、乳幼児では、瞬間瞬間の「快不快」が優先され、相手が同じ親であっても、自分の欲求を満たしてくれる「良い母親」と満たしてくれない「悪い母親」が別の存在であるかのように「分裂」を起こしている状態である。ここでの関係性は、部分対象関係と呼び、「白か黒か」「全てか無か」という二分法的思考である。その結果、思い通りにならないとき、それを周囲のせいにして、欲望を満たしてくれない周囲を悪者とみなし、悪者に対して敵対して、反撃を加えようとする状態である「躁防衛」を実行する。自己愛者が主に用いる姿勢と言える。芹沢が述べているイノセンスは、Kleinが提唱した、妄想分裂ポジションそのものではないであろうか。自己愛者は、容易にイノセンスへ退行するのである。

抑うつポジション (Klein, 1957 小此木・岩崎訳 1985) とは、それとは逆に「不快」



なことが起きた時、その原因が自分にあるのではと考える姿勢で、相手の不快さも理解出来る（感情移入による共感能力）ようになるのである。つまり瞬間や部分だけでは無い、相手の恒常的で全体の姿が見えてくる全体対象関係を持つことが可能になり「白も黒も」と言った弁証法的思考を身につける。思い通りにならないとき、むしろ自分を責め、落ち込んだり後悔したりする状態であり、自己愛者にとっては耐え難い姿勢なのである。この姿勢は、人間が成熟しイノセンスが解体に向かった状態と理解できる。

この二つのポジションを別の角度から考えてみる時、Frith (2003) の、本能的な共感と、志向的な共感とを区別して前者を sympathy、後者を empathy と呼んでいる考え方が参考になる。前者は「こころ」を介さない地続き的な共感であり、「共鳴」「共振」と言うべきもので、後者は他者の心に対する（他者の志向性に誘発される）「共感」である。自閉症者が用いることが多い他者理解の様式が sympathy であると述べている。sympathy は、自然や生き物に対して発動する、こころというプリズムを介さない素直な同一化である（溝部他、2016）。sympathy とするシンプルな他者理解の在り様は、思い込みの要素が極めて多く存在する。何故なら、sympathy を発動するには、他人と自分は地続き的な自他未分化（一心同体）の状態である事が前提だからである。sympathy は、イノセンス状態にある時（妄想分裂ポジション）の他者理解であり、empathy は、イノセンスが解体した状態にある時（抑うつポジション）の他者理解と考えられないだろうか。筆者は、sympathy を他者理解に頻繁に用いているのは、Frith が述べる自閉症者だけではなく、統合失調症者や自己愛者、さらには芸術家や育児中の母親にも色濃く存在すると考えている。この事は、自己愛者が、他人の表情に敏感に反応するにも関わらず他人

の気持ちには鈍感である事実と一致する。自己愛的人間が増えれば、自己の行動の正当性を確信して他者への思いやりや配慮に欠いた関係性が主体となり、各々がイノセンスへ退行するので、安定した三者関係を構築出来る「大人」が居なくなる。甘える者（イノセンスに退行した子ども）ばかりで、甘えさせる者（イノセンスを解体した大人）が居なくなり、安定したうらの世界が瓦解した結果こそが孤立・無縁の状態なのではなからうか。

#### 4. 「うら（こころ）」の意味

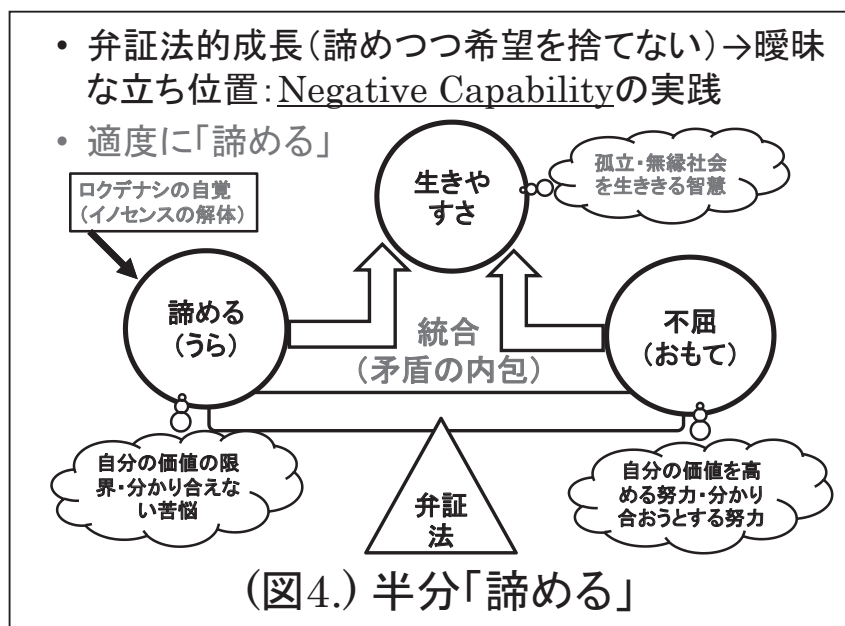
「本音と建前」、「裏と表」を使い分ける自分とは、表裏一体であるが、一つの自己としてきれいにまとまっている訳ではなく、また二つの自己にまったく分裂している訳でもない。成熟することは統合的对象と統合的自己の安定した関係を基盤とすると言う、対象恒常性と言う概念は、そのまま鵜呑みにできないであろう。E. H. エリクソンのアイデンティティ論もそうだが、アメリカ文化と言う多文化社会、異人種社会でこそ、自分の一貫した自己と安定した関係や動揺しない主張が評価され、個である事に価値があるのであろう（北山、2007）。

「うら」は心の古の呼び方であり、「うら寂しい」「うら悲しい」など用いられる。対して「おもて」は面の呼び方である様に、見えない「心」を覆っている目に見える「面（顔）」である。前述の北山は、現実の裏は心の裏の「はけ口」「隠し場所」でもあったと言うのだが、いま内外から裏が失われて「心（うら）」はどこへ行くのだろうかと言っている。どこもかしこも「おもて」ばかりで、取り澄ました「駅表」とは違う雑然としながらもホッとする「駅裏」も、曖昧で情緒的美しき「うら（心）」が残っている「裏日本」も、その呼称が差別的と消えてしまった。

「おもて」「建前」「キレイごと」が幅を

きかす現代社会であるが、人々はおもての世界のみを求めているのであろうか。確かに、人は他者と良好な関係を築く為には「おもて」(表・面)である「建前」で付き合う必要がある。不用意に「本音」である「うら」(裏・心)を見せることはない。おもての世界は、対等な世界である。行政の人との関わり方は、おもての関わり方の典型であろう。親密な関係(親密圏ではない)では、うらの世界が顔を出す。うらの世界では、対等な関係性は影を潜め一体感が支配する。前述の様に、一体感・一心同体とは「甘える/甘えさせる」が成就した静的状態である。自他が分化されている状態でありながら、自他未分化の状態へ回帰する事を求めているのである。成熟して、自立した主体として他者と対等に生きる術を身につけた大人は、論理的な世界(ロゴス)を生き抜くことが可能である。しかし、社会的弱者はもとより成熟した大人でも、ロゴスのみを生きるのは息が詰まる。情的な世界(パトス)であるイノセンスへ憧れる結果となるのであろう。図3.で示したように、固定してしまえば「絆」の支配-被支配的側面が強まってしまう。おもて(ロゴス)に偏っても、うら(パトス)に偏って

も、現実を生ききれないであろう。どちらも、「半分諦める」事が必要となる。「いい加減に諦める」と「良い加減に諦める」、「テキトーに諦める」と「適当に諦める」を揺れ動きながら、曖昧な世界を生き抜くことが大切であると考え(図4.)。この「曖昧さに堪える姿勢」は、英国の詩人John Keatsが弟に対する書簡中で述べた「詩人的態度」を土居(1992)が「臨床家のために」として言い換えたところの“Negative Capability”の能力の涵養であると思う。土居の言葉を借りて説明すると「詩人にとってと同じくらい面接者にとってもこの能力が必要であろう。(中略)もちろんいつまでも『わからない』に終始したのでは困るのであって、そこを通過いつかは『わかる』に到達しなければならない。そして、それこそ真の共感である。」ここでの前提条件は、「他者はわからない」を基本原則としている事である。「完璧には理解し合えない孤独感」を抱えながら生き抜く事を面接者に要求する、自己に厳しい姿勢の獲得を目指している。この面接者の姿勢が、「わかってもらえない(孤独)」を抱えきれず孤立している者(自己愛者をはじめとして)を支える縁となるのではないかと考えて



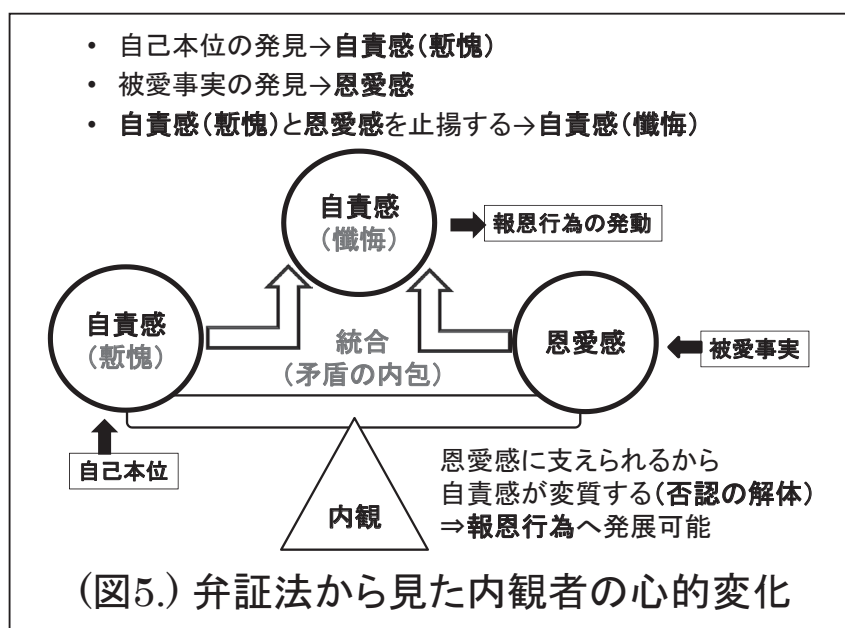


いる。

## 5. 「ロクデナシの自覚」と「諦め」

大人になっても妄想分裂ポジションが優勢な人物（我が儘～自己愛者・依存症者・境界型人格障害者）の治療に内観（療法）が有効であることが知られている（溝部，2016）。内観とは、1週間隔離された環境で、ひたすら内観三項目（「お世話になったこと」「して返したこと」「ご迷惑をかけたこと」）を親疎順年代区分反復反省法で回想するのである。例えば、母親に対して幼稚園の時の内観三項目を事実上添って1～2時間考え、面接者に簡潔に報告する事を時期・対象を替えて繰り返す。自己愛者は、前述の対象と同様に自己自身も（評価される）「良い自己」と（評価に値しない）「悪い自己」に分裂する、二分法的思考を実施する傾向が知られている。自己愛者は、評価されたいとの強い思いがあり、完璧主義と成りやすい。つまり、出来ない自分を受け入れきれず自己否定となる。自己否定に堪えかねて、他者否定（自分は悪くない：イノセンスへの退行）が生じる。内観は、「悪い自己（自己本位）」でも愛された

（完璧でなくても構わない事）「被愛事実」を徹底的に想起させる構造になっている。イノセンスが肯定されていた事を想起する操作により、イノセンスの解体が促され。その結果、自己愛者の抑うつ（自責感・罪悪感）を慙愧から懺悔に変換させて抱えられる様になることが出来ると考えられる（図5.）。広辞苑によると、これらの自責感は、慙愧懺悔と熟して用いることが多かったのだが、慙愧は、恥じ入ることであり、懺悔は、過去に犯した罪を神仏や人の前で告白して許しを請うことである。前述の阿闍世は、父親殺しを恥じて慙愧の念に堪えかねて自暴自棄になってしまう。そしてイノセンスが表出した状態を、友人の耆婆がイノセンスを受け止める事で、イノセンスが解体（未生怨の解消）する。浄土真宗に深く帰依していた古澤（1954）は、「慙愧」を外から強いられた、処罰恐れ型の「罪悪感」と呼び、「懺悔」を他者からとろかされる事で自発的に生じる、許され償い型の「懺悔心」と呼んで区別している。これは、エディプス・コンプレックスと阿闍世コンプレックスの対比となっている。懺悔が生じている状態では、自暴自棄になる様に自分を裁いている自分が観ている（芹沢・武田・



今津, 2010)。自分を分裂させることで、部分対象的観点である「白か黒か」との二分法的思考から、全体対象的観点である「白でも黒でも」との弁証法的思考への転換（相対化）が図られるのだと考えられる（奥村, 1985）。内観でも、過去の自分の行為を、現在の自分が観ると言う様に、「観る自分」と「観られる自分」に自己を分裂させ、加虐的（ロクデナシ）な自分を自分で調べるのである。ここで重要なのは、内観面接者自身の内観体験が、内観者に対して「共感的」姿勢を生じやすくする点であろう。さらに言えば、内観面接者自身が自分の「ロクデナシ（醜さ）を自覚」することで、内観者の語る「見にくさ（醜さ）」から逃げ出さず受け止めることが可能となる（溝部, 2016）。阿闍世に対する友人の耆婆の役割を内観面接者は行うと考えられる。自己愛者が、懺悔する様になると言う事は別の言い方をすれば、誇大的に肥大した自分の価値について「諦める」事である。諦めると言えば、自分の願いごとが叶わずそれへの思いを断ちきる、という意味で使われるのが一般的で、否定的なニュアンスがある“Give up”を思い起こさせる。しかし、「諦観」といった熟語には「つまびらかにみる」＝「つまびらかにする」「明らかにする」が、本来の意味（諦：梵語satya＝真理・道理：広辞苑）である。内観は、自己愛者が否認している「醜い自分」を「見にくいながらも観る」事を受け入れさせるのである。醜い自己を知る事（自己本位の発見）で、慚愧の状態に到達するのであるが、これに被愛事実の支えがあってこそイノセンスが解体し懺悔（自分に責任がある）の姿勢が生まれる。懺悔心が生じた状態では、受け止めてくれている他者への要求水準が低下し報恩行為が触発されるので、甘えるだけではない甘えさせる行為を生み出す。この状態像の変換過程が他者との「絆」そのものである。

## 6. まとめ

「孤立・無縁社会」を形成してしまっているのは、現代人の肥大した自己愛であると言う観点から、自己愛者のうらの世界を「絆」「イノセンス」「阿闍世」をキーワードに論を展開してみた。さらに、「孤立・無縁」を解消するには、「諦め」が肝心と結論づけたのであるが、諦めることは容易ではない。現代は「諦める」ことが困難な時代である。マスコミも学校も親もNever Give upを称賛する。「諦めきれない」要因の一つに、自己愛者でなくとも、現代人にみられる自尊感情・承認欲求の高さがある。自信がないのに「君たちには無限の可能性がある」と持ち上げられる若者は、容易にイノセンスへの退行を促されてしまう。そこで、自尊感情・承認欲求を、適正レベルまで下げる必要性がある。教育や政策は筆者の専門外であるので触れる事はできないが、心理学的にはある程度アプローチが可能である。「自尊感情（プライド）が高い」のは「自信がない」からバーチャルなプライドにしがみつくと考えられる。この解消策として、宗教では「ゆだねる姿勢」を獲得する事で、自らの「計らい」を捨てて、プライドの低下を図るのである。しかし、主体性（計らい）を重んじる現代人には容易には受け入れがたい姿勢であると思われる。そこで、ゆだねる姿勢を前面に出さなくても、「ロクデナシの自覚（イノセンスの解体）」を持つと、自尊感情は当然低下する。つまり誇大な自己像を諦めるのである。さらに、他者への要求水準も低下するので、他者への非難や攻撃が減少する。しかし、「醜いもの（ロクデナシの自分）を観る」ためには訓練が必要であるのだが、「醜いものは見にくい」から一人で訓練する事は困難である。イノセンスを肯定してくれる支えとなる他者が必要である。ここで心理療法（内観療法）の果たす役割は、セラピストの支えの

下、「おもて（建前）」である「不屈（諦めない）」の姿勢と「うら（本音）」である「限界を知る（諦める）」姿勢と言う決して完全には統合するに至らないコトを架橋する（矛盾を内包したままでの統合）事で、人々を生きやすくするのではなかろうか。「孤立・無縁社会」を生ききる智慧は、図4.で示した様に「半分諦める」曖昧な姿勢（Negative Capability）を弁証法的に発展させていく事と考えている。

## 7. おわりに（謝辞に代えて）

この論考をまとめるに当たって、追手門学院大学創立50周年記念事業「地域支援心理研究センター分室・附属心の相談室分室 開設記念シンポジウム：孤立・無縁社会を生き抜く」が重要であった事は論を待たない。特に基調講演者である相愛大学人文学部教授の釈徹宗先生、シンポジストである追手門学院大学心理学部長の浦光博先生、市民代表として参加いただいた茨木市市政顧問の辻由起子先生には討論にて様々な示唆を頂いた。さらに、司会の労をお執り頂いた追手門学院大学地域文化創造機構長の河合博司先生やシンポジウム運営スタッフに感謝したい。

## 8. 引用文献

土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂  
土居健郎 (1992). 新訂 方法としての面接  
医学書院  
Freud, S. (1917). *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Nikol Verlagsgesellschaft mbH & Co. KG, Hamburg (井村恒郎・馬場謙一訳 (1970) 精神分析入門 日本教文社)  
Frith, U. (2003). *Autism Explaining the Enigma, 2nd edition*. Blackwell, (富田真紀 他訳 (2009). 自閉症の謎を解き明かす

東京書房)

Freeman, D. M. A. (1993). "Looking, Precocious Individuation and Appeal Behavior Portrayed in Ukiyo-e Art of the 17-19th Centuries," *Presented at Amer. Psychoanal. Association, Interdisciplinary Colloquium*  
自民党ホームページ (2017). 日本国憲法改正草案Q & A (増補版)  
北山修 (2007). 劇的な精神分析入門 みすず書房  
北山修 (2012). 幻滅論 (増補版) みすず書房  
Klein, M. (1946-1955). *The Writings of Melanie Klein Vol.4 Envy and Gratitude and Other Works*. Hogarth Press, London (小此木啓吾・岩崎徹也編訳 (1985).メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂世界 誠信書房)  
Klein, M. (1957-1963). *The Writings of Melanie Klein Vol.5 Envy and Gratitude and Other Works*. Hogarth Press, London (小此木啓吾・岩崎徹也編訳 (1985).メラニー・クライン著作集5 羨望と感謝 誠信書房)  
古澤平作 (1954). 罪悪意識の二種 - 阿閼世コンプレックス, 精神分析研究, 1 (オリジナル1934 長陵)  
溝部宏二 (2016). 現代社会の必然としての自我肥大者 (自己愛者) と内観 ～宗教性に続く精神の弁証法的発展 内観研究 22, 3-12  
溝部宏二・中川彩華・南浦由佳・清澤亜希子・赤根美結・子日康史・藤井崇央・大川恵莉子・松原彩乃・末代咲恵・加藤宏明 (2016). にこにこ教室最終講義 ～心理臨床における主体性を育む療育プログラム実施の意義：「積極的見守り」姿勢の獲得～追手門学院大学心の相談室紀要, 13, 35-70  
Nitobe, I. (1899). *Bushido: The Soul of*

- Japan*. Leeds and Biddle Co., Philadelphia  
(矢内原忠雄訳 (1938) 武士道 岩波文庫)  
奥村二吉 (1985). 原事実について 岡山大学  
医学部神経精神医学教室  
小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社  
小此木啓吾・北山修 (2001). 阿闍世コンプレックス 創元社  
越智貢・川本隆史・高橋久一郎・金井淑子・  
中岡成文・丸山徳次・水谷雅彦編集 (2004).  
応用倫理学講義(5) 性/愛 (井上たか子  
「親密圏」) 岩波書店  
芹沢俊介 (1997). 現代〈子ども〉暴力論  
増補版 春秋社  
芹沢俊介・武田定光・今津芳文 (2010). 阿  
闍世はなぜ父を殺したのか ボーダーインク  
島崎藤村 (2005). 破戒 新潮文庫 (オリジ  
ナル1906 自費出版)  
内田樹 (2010). 邪悪なものの鎮め方 バジ  
リコ